

外 国 語

英 語（筆記）

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和2年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、昨年度までの問題形式を踏襲しながら、様々なコミュニケーションの場面における、用途に応じた読解力や表現力を問う問題が出題された。全体として、コミュニケーション重視の観点からの工夫が凝らされたものであった。易しめの問題からやや難しいものまで、難易度もバランスの取れた出題であった。

本年度の「英語（筆記）」の受験者は昨年度の537,663人からやや減少して518,401人となった。センター試験受験者の約98.4%がこの科目を受験しており、受験者や高等学校関係者のみならず、各方面からの関心も高い。

本年度のセンター試験「英語（筆記）」を検討・評価するに当たり、その拠り所としたものは以下の三つである。

- (1) 高等学校学習指導要領
- (2) 令和2年度大学入試センター試験出題教科・科目の出題方法等

「英語（筆記）」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「英語表現Ⅰ」を出題範囲とする。

- (3) 平成31年度大学入試センター試験の試験問題評価委員会報告書

また、主に検討・評価した項目は、内容・範囲、分量・程度、表現・形式等についてである。今年度の本試験の平均点は116.31点（100点換算58.15点）で、昨年度の123.30点（100点換算61.65点）から約7点低下した。多少の変動はあったものの、問題作成の際の目標平均点が120点（100点換算60点）程度に設定されていることを考慮すると、適切な出題であったと言える。

2 試験問題の内容・範囲等

全般的に、扱う題材と状況設定に無理なところは見られなかった。文章も設問も標準的なレベルの英語で書かれており、受験者にとっては取り組みやすい問題が多かった。使用されている総語数は昨年度よりやや増えたが、出題の分量としては適切である。いずれの大問も、昨年度までの形式をほぼ踏襲しており、全体として、高等学校での学習内容の定着度を測る適切な問題であった。

第1問A 昨年度と同様に、下線部の発音がほかの三つと異なるものを選ぶ問題が3問出題された。子音の発音を問う問題が2問、母音の発音を問う問題が1問とバランス良く出題された。いずれの問題でも使用頻度が高い基本的な単語の発音が問われており、下線部の発音の違いも明確である。実際のコミュニケーションにおいて活用できる語彙を習得するためには、こうした基本的な単語の発音に注意しながら聞いたり話したりする活動が必要である。

第1問B 昨年度と同様に、第一アクセントの位置がほかの三つと異なるものを選ぶ問題が4問出題され、二・三・四音節からなる単語がバランス良く出題された。日常生活の中でカタカナとして使用頻度の高い単語も多く含まれており、allergyやalcoholなど日本語と英語ではアクセントの位置が異なる単語も取り上げられた。また、strategyやinstanceなど子音が連続する

単語や、四音節からなる単語については、音節を適切に区切ることができない受験者もいたのではないかと考える。授業で新出語彙を学習する際には、綴りだけに注意を払うのではなく、言語活動を通して、英語の音声上の特徴や英語特有のリズムを習得することが重要である。

第2問A 語彙と文法・語法の空所補充問題が10問出題された。うち3問は、昨年度と同様に、空所を2ヶ所設け、適切な語句の組合せを選ばせる問題であった。問われた言語材料は語彙や慣用表現の知識に関わる基本的なもので、標準的な問題で構成されていた。いずれの問題も、基本的な語彙と文法・語法を中心としながらも、表面的な知識だけではなく、英文を正確に構成する力、また文の意味を捉えて判断する力が問われた。

第2問B 昨年度と同様に、全て対話形式の語句整序問題で、問題数は3問、選択肢の数も六つ、解答箇所も2番目と5番目であった。いずれの問題も、前後の文脈を正しく読み取った上で、文法的に正しい英文を組み立てる力が問われた。問2の関係代名詞を含むyoungest of whomや、問3のas planned、put it offという表現は、並べ替えて適切な場所に配置するのに苦労したと思われる。

第2問C 昨年度と同様に、2往復の会話文の中の最後の発言を、3ヶ所に分かれた二つの選択肢を組み合わせて完成させる問題であった。文法・語法上は成立する組合せが多く、文脈の上で適切かどうかを判断して正解を選び発言を構成する力が求められている。会話文の論理展開を読み取れば自然な英文を構成していくことができ、全体として標準的な問題であった。

第3問A 昨年度と同様に、一つのパラグラフから、まとまりを良くするために取り除く方が良い一文を選ぶ形式の問題が3問出題された。内容に首尾一貫性があるかどうか、パラグラフを構成する上で文と文とのつながりが適切かどうか、読解力のみならず、まとまった長さの英文を書く際に求められる力も問うものである。かなり注意深く読まないで正答しにくいものもあり、単独の文の理解ではなく、パラグラフとしての内容把握、文脈を意識した読解を求めるものと言える。

第3問B 「慈善活動の企画」に関して7名の大学生が行うやりとりから、発言の主旨を読み取る問題であった。まとめ役の学生の発言を完成させる形式であるが、直前のある一人の発言内容をまとめるだけでなく、複数の学生の意見を総合したり、次に続く展開を述べたりと、話し合いの流れを追いながら理解していく読み方ができるかが問われた。英語でのディスカッションを行う授業等を通して、発言者の主張を確認したり、議論をまとめたり方向付けしたりする学習を積み重ねる必要性を再認識させる出題であった。

第4問A 「練習の仕方とボール投げの結果の関係」について論じた英文を読み取る問題であった。昨年度までは英文中に図やグラフが含まれていたが、それが無くなり文章のみとなった。代わりに一つの設問が図を用いたものとなり、図表を参照しながら説明文を読むという読み方は、設問の中で問われる形で踏襲された。文章中には三つの実験群を設定した実験とその結果が述べられており、それぞれの理解度が設問で問われた。実験自体はおそらく受験者にはなじみの薄いものであり、内容の理解、少し難解な選択肢の英文の理解と合わせ、やや負荷のかかるものであった。数字や比較表現への習熟を問う設問は見られなかったが、最後のパラグラフに続くのにふさわしい内容を問う設問が復活した。

第4問B 「フリーマーケットへの出店申請に関する案内」を用いた読み取り問題であった。従来からの情報検索読みの力を問う問題であるが、表の中の情報量が減り、昨年度にも増して文章の割合が増え、情報検索よりも文章読解の比重が一層高まった。しかし、図表で示された内容から必要な情報を得ること、注釈を見落とさないこと、また問いの条件設定に合う内容を全体から見つけ出すこと、といった注意深い読み方と的確な判断力を求める出題意図は変わって

いない。様々な情報から必要なことを選び出して判断するという、実践的な思考力を英語で問う問題である。題材も身近で比較的取り組みやすい出題であった。

第5問「山ではぐれた愛犬との不思議な再会」について一人称で書かれた標準的な物語文である。内容はファンタジーの要素を含んでいるが、出来事が起こった順番に物語が展開されており、日常生活でも使用頻度の高い平易な英文で描写されているため、受験者にとっては場面を把握しやすかったと推察される。設問については、問1から問3のように、本文全体の流れを把握し、状況を時系列に沿って理解しているかを問うものや、問4のように登場人物の心理や発言に即してフレーズの意味を類推させるものなど、いずれも本文の表面的な理解ではなく、読み取った情報を整理して考えさせる、思考力を問う良問である。問5では登場人物の感情の変化を問う問題が出題された。平成28年度から出題されている物語文の読解には、登場人物の発言や事実関係から、人物の心情等、行間を読む力が求められる。物語文の読解を通して豊かな心を育むことにもつながると考え、このような出題を評価したい。

第6問「自動販売機の発達」についての論説文であった。語数はほぼ昨年度並みで、受験者にとって身近なものを題材としており抽象的な表現もそれほどなく、十分に時間内に読み切れる問題であったと言える。また、問題形式においても昨年度からの大きな変更はなく、例年どおりAが5問、Bが1問の出題であった。Aについては、各パラグラフの内容把握と特定の情報を正確に読み取る力が求められている。問3は、counterfeitという語の意味を文脈から類推させるものであった。パラグラフ全体の流れからすると比較的類推しやすいが、下線部を含む文の構造が複雑で、また選択肢を難しく感じた受験者もいたのではないかと思われる。問5は、昨年度と同様に本文の主題を問う問題であった。Bについては、各パラグラフの要旨を選択する問題であり出題傾向に変化はなかった。本文の各パラグラフの内容がはっきりしており、取り組みやすかったものと思われる。全体としては難易度に変化はなく、英語の正確な知識に基づいて細部の情報を読み取りながら、同時に文章全体を俯瞰して読む力が問われる良問であった。

3 分量・程度

出題形式は昨年度とほぼ同様で、設問数は48問、総マーク数は54で昨年度と同じであった。設問数としては適切で、使用された総語数はやや増え約4,400語となったが、様々な種類の文章の読解力が身につけば時間内に解答できる適切な分量であった。普段から文脈を意識した言語活動を行う、あるいは、与えられた題材から必要な情報を的確に捉えたりする等、コミュニケーション能力を培う学習を受験者に意識させる問題であった。また、今年度も昨年度と同様に標準的な問題が多く、全体として高等学校の英語の基本的な学習内容を踏まえた適切なものであった。問題の構成と難易度については次の表に示すとおりである。

本試験の出題内容、設問数、配点、難易度

	出題内容		設問数		1問当たりの配点		配点		難易度
第1問	音声の知識	A	単語発音	3	7	2	6	14	☆
		B	単語第一強勢	4		2	8		☆☆
第2問	語彙・文法語法・表現	A	語彙・文法語法	10	16	2	20	47	☆☆☆
		B	語句整序英作文	3		4*	12		☆☆☆
		C	会話応答の英作文	3		5	15		☆☆
第3問	論理・談話構成を問う読解	A	不要な文の削除	3	6	5	15	33	☆☆
		B	発言内容の要約	3		6	18		☆☆
第4問	情報处理的視点からの文章の読解	A	図表と説明文の理解	4	8	5	20	40	☆☆
		B	案内文の内容の理解	4		5	20		☆☆
第5問	出来事の展開を叙述する文章の読解		物語文の内容の理解	5		6	30		☆☆
第6問	論説文の読解	A	内容の理解	5	6	6	30	36	☆☆
		B	段落要旨の理解	1		6*	6		☆☆
平均点		116.31 (昨年度 123.30)		48問		2～6点	200点		

(注) 1 4*、6*は空所が全て正解の場合のみ点を与えられる。

2 難易度については、おおよその正答率に基づき、次のように表記する。

☆☆☆：やや難 ☆☆：標準 ☆：やや易

4 表現・形式

今年度も従来どおり、発音・アクセント、語彙・文法語法、語句整序、会話文、図表を用いた説明文の読解、長文読解等の幅広い分野から様々な形式の出題がされ、読んだり書いたりする力を中心に、場面や目的に応じたコミュニケーション能力をバランス良く測るものであった。なお、問題の指示文には、特に誤解を招くような表現は見られなかった。

5 要約（意見・要望・提案等）

(1) 要約

- ① 高等学校学習指導要領及び高等学校教科書等に基づき、高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する問題としておおむね適切であった。
- ② 扱われている内容やテーマは受験者に身近なものが多く、特定の受験者に有利になると思われるものや分野の偏りもなく、取り組みやすいものであった。
- ③ 出題形式や配点に関しては昨年度と変更はなく、おおむね適切であった。
- ④ 総使用語数は昨年度よりやや多いが、受験者が時間内に無理なく解答できる分量であった。
- ⑤ 様々な難易度の問題が出題されており、全体的には目標とする平均点に近い結果であった。
- ⑥ コミュニケーション能力を重視した学習の成果を問う問題として妥当であった。

(2) 意見・要望・提案等

- ① 第1問の単語の発音やアクセントについての問題は、ペーパーテストで音声面を評価することの信頼性や妥当性の問題はあるものの、正確な発音とアクセントの知識はコミュニケーションを行う上で重要なものであるというメッセージを、学習者に発信してきたことの意義は大きい。
- ② 第2問の語彙・文法語法・表現等の運用力を問う問題は、英語の読解力や運用能力を高める上で、その基礎となる学習の重要性を訴え、発信力の土台となる力を身に付けることの必要性を伝えるものとして、一定の役割を担ってきたと考え、大いに評価したい。
- ③ 第3問Aは、文章の構成を考えながら読む問題であると同時に、書く活動において求められる力も問う良問であった。また、第3問Bは、実際のコミュニケーションの場面を想定した問題として価値あるものであった。このように論理性や談話構成に学習者が意識を向けられるような出題を、可能であれば今後も採用していただきたい。
- ④ 文章の中にある語句の意味を文脈から類推する問題は、英語学習者が文章を読む上で必要とする力を問うものである。このように、知識だけではなく、本文に根拠を求めた上で答えを導き出すことができるような、読解力・思考力を問う出題を今後も継続していただきたい。
- ⑤ 今後も説明文・物語文・対話文等、様々な種類の文章をバランス良く扱っていただきたい。なかでも、今年度の第5問のような物語文は、表面的な理解にとどまらず人物の心情や行間を読む力を身につけるものとして、今後も継続して出題していただきたい。
- ⑥ 第4問・第6問で扱われたトピックは、受験者にとって分かりやすいものであった。今後も、受験者にとって公平で、背景知識の有無が解答に極端に影響を与えないようなトピックを選んでいただきたい。
- ⑦ 図表を用いた説明文や広告・案内文から情報を読み取る問題については、できるだけ見やすく読み取りやすい資料を使用していただきたい。また、日常生活で行われる自然な読み方に沿う問いかけにしていきたい。ページ上の配置についても、引き続き配慮をお願いしたい。
- ⑧ 高等学校学習指導要領に基づき高等学校段階でも四技能を統合した英語力の育成が求められている。今後は、「英語（リーディング）」という試験の中でも、多様な言語技能や思考力を測る出題を強く願いたい。

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

(代表者 鈴木 真人 会員数 約60,000人)

T E L 03-3267-8583

1 前 文

本稿では、2020年度（令和2年度）大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）英語（筆記）問題の検討を行う。

今年度のセンター試験は昨年度と比較して問題の形式上変更はなかった。来年度は大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）へ移行するため、今年度は本形式の問題の最後の年となった。移行に伴い、今回のセンター試験では、従来の発音問題や語順整序等のいわゆる間接問題を残しつつも、コミュニケーション重視の観点から内容や場面設定に改善が進められており、新しい高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえた設定となっている。

昨年度と比較して量的にもほとんど変化はないが、総語数としてかなりの数である。このため、受験者にとっては依然として速読力が求められる。一律な英文の読み方をするのではなく、素材となる英文の種類や目的に応じて様々な読み方をするのが要求され、設問の趣旨に合った読み方をしなければ時間が不足する。速読と精読のバランスや効果測定の観点からこれ以上語数を増やすことは有効ではないと考える。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 発音と強勢に関する設問である。問題数は昨年と同じく7問で、14点の配点である。

紙面における発音問題については、発音できるということと、紙面で識別することができるということは全く別の問題であるという観点から、賛否が分かれる。昨年度行われた試行調査（プレテスト）においては、発音問題が廃止された。今回のセンター試験で出題されたものについては、語彙の選定と発音指導の観点から無理のないものとなっている。

A 各音の識別の問題。子音字scの発音、子音字sの発音において [z] か [s] か、母音字uの発音において [u:] か [ʌ] かなど、つづり字と発音の関係からも指導上の重要事項であり、きちんと認識して発音できるようにさせたいものばかりで、実際のコミュニケーションにおいて適切に活用すべき技能に結び付いている。

B 強勢の問題で、今年度もほかの三つと異なる音節に第一強勢が置かれる語を選ばせる形式であった。いずれも高等学校で習得する標準的なレベルの語彙の中から出題されている。また、allergy、strategy、alcohol、democracyなどカタカナ語になった英語が問題の中に散見されるが、英語本来の発音とは大きく異なるカタカナが横行する中、正しい発音や強勢を勉強させる意味において、このことは大変意義深いことであると判断する。

第2問 Aは文法・語彙語法に関する問題、Bは語整序、Cは応答文完成問題である。

A 文法や語彙語法に関する問題の出題に変化はなかった。受験者にとって比較的取り組みやすい問題である。今年度も日常のコミュニケーションでの重要な表現に関する問題が多い。問8～10が2ヶ所の空所に適切な語句を入れる形式に変わって6年目になる。以前にも指摘があったが、片方の空所を正確に答えることができたとしても、もう一方の空所の選択が不適切であれば得点につながらないことから、受験者にとっては難易度が高くなる。例え

ば、blocked / clearは二項対立的な要素から判断、give it a second thoughtは、慣用句として両方を解答することが求められたとしても、問10 17のA、Bは独立した要素であるので、本来であれば個別に得点を与えるべきところである。

B 語整序の問題で、整序部分の前後に状況を説明する語句や情報があり、また対話文形式で場面に結び付いていることから、語句を並べかえる上でヒントとなり、取り組みやすい問題となっている。このように、わずかな情報でも、その場の状況が把握できるような問題が出題されれば受験者も取り組みやすいのではないかと思われる。また、各問のターゲットとなる文法や語法についても基礎学力を測る上で非常に重要な項目が選択されており、よく練り上げられた問題である。しかし、以前から指摘されてきたとおり、語順の2番目と5番目のみを解答して、他の語順が問われない点において、この種類の問題の妥当性に対する疑念が残る。

C 対話文の流れに合うように文頭から適切な語句を選択して英文を完成する問題である。追・再試験において初めて出題されてから6年目になる。以前は対話の内容と文法的な判断に基づき正答を導き出すやや欲張った問題という印象があったが、「対話文の流れ」を問う要素が加わりコミュニケーション重視という点で改善されている。lessとmore、doesn't objectとobjects、essentialとmeaninglessなど、対話の流れや前後の関係から意味の上で間違えやすい対比を捉えて選択する。実際のコミュニケーションに即した内容となっている。

第3問 以前の問題Aの要素が第2問Cに統合され、以前の問題Bが問題Aに変更されて3年目になる。問題の内容に変化はなく、この形式の問題は今年で7年目の出題となった。以前の問題Cは問題Bとなり、こちらも変更して3年目になる。問題Aと同様に問題の内容に変化はなかった。各問題のねらいは明確で工夫された設問であるが、英語を読む量が多く速読力が試されるので、受験者にとっては決して易しい問題ではない。

A 文脈に合わない不適切な英文を選ぶ問題形式が導入されて7年目になるが、以前の問題Aがなくなった影響でこの問題の総語数は増加した。この形式の問題は、読解力や論理構成力を測る目的で作成されていると判断するが、根拠を持って無関係な文を除外するということは、受験者にとって極めて難しいタスクであると考えられる。いずれもテーマは学校の授業で取り上げられる題材や、本や新聞の記事などで読んだことがあるようなものが多いが、他の問題と同様、共通テストにおいても、高等学校で習得する標準的なレベルの語彙を使い、実際のコミュニケーションにおいて目的や場面、状況などに応じて適切に表現したり伝え合ったりできる身近な題材が出題されることを期待する。

B 恒例の慈善活動を控えた大学生がどのように募金を集めるのかをテーマにしたディスカッション（話し合い）である。7人の学生のやりとりで、テーマに対する発言者の論旨も明快で、解答に当たって迷うところはなく、受験者にとっては取り組みやすい問題である。また、三つ目の問いはこれまでと同じく発言者全員に共通する意見を集約する形式の問題であり、今回も更にこの後の議論の展開を予想させる問題であった。多くの受験者は高等学校の授業等におけるディスカッションの活動で、一連の議論を俯瞰しながら全体の方向性を考え、グループの意見を一つにまとめることを経験しており、この形式の問題は実践的な力を測定する点において日常の授業と密接な関係を持つ。

第4問 Aでは、図と本文を的確に読み取る問題、Bはスキミングの力が試される問題である。英文の種類に応じて様々な読み方が必要になることを示唆している。

A Aは図とそれに関連する英文「練習プログラムがスポーツ（ボール投げ）の成績に及ぼす影響」について情報を読み取るものである。今回は図からの読み取りだけで正解が得られる

問題はなくなり、本文中から、あるいは図と本文の組合せによって正答を導き出す問いとなっている。英文の構成においてパラグラフの最初に In this study, ... The students were assigned ... Results showed that ... などの表現があり、論理展開で内容や流れを把握しやすい文章である。また本文中の表現と選択肢の表現が自然なパラフレーズとなっており、適切な内容である。

B フリーマーケットの出店申請に関する案内文（パンフレット）である。実用的な英文を使い必要な情報を的確に読み取る力を問う問題であり、新しい高等学校学習指導要領の「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考え方などの概要や要点……などを的確に理解」する力を問う設定となっている。

この問題は、設問が先に設定されているので、実際のコミュニケーションの場面からすれば、やや違和感があると捉えられることがあるが、必要な情報だけを探しながら案内の情報を読み取る問題であり、この読解の過程は実践的であるとも言える。過去に出題された問題には、一見して文字が小さく行間も狭く複雑で分かりにくいものがあったが、その後改善が進み、文字の大きさや行間の幅などが改められ、一目でどこにどのような情報があるのかがすぐに分かるようになり、取り組みやすい問題となった。必要以上に情報を満載して、単に注意力を試すような問題にすることは避けるべきである。

第5問 平成28年度に大問の構成において当問題に変化があり、いわゆる「物語文」に基づいて問題を解く形式に変化した。この形式は平成27年度の追・再試験の第5問で出題された形式で、過去の問題を振り返ってみると平成19年度まで出題されていた第6問の問題Aの形式でもある。以前の問題は、一つの事象に対して二者の異なる人物の報告や見解を読んだ上で問題に答える形式で、それぞれの相違点に注意を払いながら取り組まなければならない複雑な問題であったが、単純に一つの流れを把握して問題に答える形式となり、受験者にとっては戻り読みをすることなく、英文を正確に読み取ることで得点につながる良問に改善されたと判断する。いわゆる英語の多読が流行している現在、物語文が試験問題に復活したことは受験者にとって歓迎されることであろう。今回の問5は、情景描写を的確に把握して主人公の心情の変化を類推する問題で、まさに想像力を働かせながら行間を読むことがいかに重要なことかということを彼らは再認識したと思われる。センター試験は新しく共通テストになるが、この形式の出題も検討していただきたい。

第6問 “The development of Vending Machine From Historical Perspective” をテーマにした論説文であった。取り上げられたテーマは、受験者の日常生活の中に存在する身近な話題であり、文中に高いレベルの語彙が散見されることもなく、いわゆる読解問題として大きな問題点はなかった。また、設問も大学入試レベルから考えて標準的な出題内容であったと思われる。

未知の語句の意味を文脈から考えさせ、読み取る力を測る問題が復活して4年目となる。また、問5で問題文のタイトルを選択させる問題が復活した。いずれの形式の問いも部分的に読む力や全体を俯瞰する力を測る問いであり、昨年度までと比べて問題の趣旨に変化はないと判断する。

3 ま と め

本稿では2020年度（令和2年度）センター試験・英語（筆記）問題について検討してきた。今年度の本試験は、昨年度と同様に、全体として英文は標準的なレベルで、素直な出題であった。センター試験は今年で終わりを迎えるが、引き続き共通テストにおいても高等学校の学習内容を理解している受験者ならば十分に対応できるような問題が出題されるよう要望したい。

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の「英語（筆記）」試験問題は、高等学校段階における基礎的な学習の達成度を判定することを目的に、次のような方針の下に作成した。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）に準拠し、「読むこと」だけでなく「話すこと」、「書くこと」も含めたコミュニケーション能力の到達度を測れるような工夫をする。
- (2) 現代の標準的な英語を言語材料とする。
- (3) 語彙、語法、慣用句、文法、表現に関する知識だけでなく、社会言語的側面、談話的側面、方略的側面も含め言語運用能力を総合的・多角的に測る。また、情報を整理し、統合し、批判的に考え、思考する力を測る工夫をする。
- (4) 取り上げる題材は、受験者にとって有用で一般的なものを選ぶ。
- (5) 問題は易しいものからやや難易度の高い発展的なものまで幅広く用意し、受験者の達成度を公正かつ正確に測ることができるよう留意する。
- (6) 使用する語彙は、高等学校における英語の履修範囲を考慮して選択する。長文読解や読解方略に関わる問題においては、やや頻度の低い語句を使うこともあるが、その場合でも文脈から推測できるように配慮する。
- (7) 過去の試験問題評価委員会報告書において要望や批判があった事項について、出題の形式、内容の改善を図る。

2 各問題の出題意図と解答結果

本部会では上記の原則を踏まえ、高等学校卒業段階で到達すべき英語力を公正かつ正確に測定する問題作成に向けての検討を継続的に行ってきた。令和2年度センター試験については、問題形式や内容を分析し、各大問で測るべき言語能力を再考した上で思考力を育成する問題となるように配慮した。第3問Aのようなパラグラフの中より論理構成にそぐわない文を選ばせる問題、第5問のような物語の展開、概要、要点などを理解する能力を測定する問題など、昨年度評価の高かった問題は継続し、思考力、判断力を測れるような問題作成を工夫した。また、試験全体を第1問～第6問の六つの大問で構成することを継承し、セクション数（中間）は12、総設問数54（ただし、第2問B及び第6問Bは部分点なしのため実際は48問、配点2～6点という構成内容で出題した。

本年度の受験者数は518,401人で昨年度の537,663人よりやや減少したが、例年同様に全科目中で最も多かった。平均点は昨年度の123.30点（200点満点）から約7点低下し、116.31点で、得点率は58.15%であった。標準偏差は42.64で、受験者の得点が広い範囲で分散していた。問題作成の目標平均点が120点（60%）程度の設定であることを考慮すると、昨年度より平均点がやや下がったものの、難易度及び得点状況の観点から今回の試験も適切なレベルであったと言える。また、試験の信頼性、受験者の能力を識別する識別力も非常に高く、全体的にバランスの良い標準的な問題であった。

出題意図を表にまとめると以下のとおりである。

大問	中間	出題意図
第1問		音声の知識
	A	基本的な単語におけるつづり字と発音の関係の知識を測定する。
	B	基本的な単語における語強勢の位置に関する知識を測定する。
第2問		語彙、文法、語法、言語使用の知識・能力
	A	与えられた英文を完成するのにふさわしい語句を選ばせることにより、語彙、文法及び語法の知識を測定する。
	B	文脈を与えた上で、単語の整序を考えさせることにより、意図された意味になるような英文を構成する能力を測定する。
	C	対話形式の文脈を与え、それにふさわしい発話文・語句を選ばせることにより、場面に応じた言語使用に関する能力を測定する。
第3問		談話レベルにおける文章の理解力
	A	文章を読ませ、論理的構成を考えさせ、文脈にふさわしい内容を構成する上で不適切な1文を判断し削除させることにより、文レベルを超えた談話レベルにおけるパラグラフの構成能力を測定する。
	B	趣旨が明確なまとまりのある話し言葉のテキストを読ませ、発言者の意見の要点を問うことにより、得た情報の要点を把握して思考・判断させ、文レベルを超えた談話レベルにおける英語理解力を測定する。
第4問		情報处理的視点からの文章の理解力
	A	図表やグラフに示された情報とあわせて英文を読ませることにより、必要な内容を整理・統合し、正確に読み取る能力を測定する。
	B	様々な形式の英文やレイアウトを含む英文を題材に、求められている情報を的確に探し出したり組み合わせたりすることにより、情報処理の一環として英語を理解する能力を測定する。
第5問		出来事の展開を叙述する文章の理解力
		ある視点から語られたストーリーを題材に、想像力を通して状況を再構築させ、ストーリーの展開、概要、要点などを理解する能力を測定する。
第6問		まとまりのある説明的な文章の理解力
	A	比較的長い説明文を題材にして、筆者が読者に伝えようとしているメッセージや行間の意味を考えさせ、個別のパラグラフの内容を論理的・批判的に考察し理解する能力を測定する。
	B	パラグラフごとの要点と相互間の論理関係、全体の構成を理解する能力を測定する。

第1問 音声の知識について問う問題である。Aは基本的な単語におけるつづり字と発音の関係についての知識を測定する問題で、母音・子音の両方を問う問題が出題されている。Bは基本的な単語の語強勢（アクセント）の位置に関する知識を測定する問題で、第一アクセントの位置が他の三つと異なる語を選択する形式で2音節から4音節で構成される語が出題されている。カタカナ語として使用されているが、実際の英単語とはアクセントの位置が異なる語も出題した。A、Bとも日常的なコミュニケーションの場面で使用頻度の高い基本的な単語を選んだ。

筆記試験で発音やアクセントを問うことの意義は、スピーキング技能につながる基礎的な音声的知識を見ることにある。スピーキングへの土台を築くと同時に、正確な発音及びアクセントの知識はコミュニケーションに重要であるというメッセージを学習者に伝え、語の意味だけでなく発音記号やアクセント記号にも注目し、学校の英語授業で音声指導を促すことを期待するものである。

第2問 語彙・文法・語法・言語使用の基本的な知識を測定する問題である。Aは空所補充問題で、最後の3問は2箇所の空所に入る適切な組合せを選ぶ問題とした。様々なレベルの問題をバランス良く出題できたと考える。最後の3問は、受験者のより高い能力を弁別的に測ることを目的としており、完全解答形式とした。Bは与えられた対話形式の文の空所にふさわしい英語を正しい順に入れることにより、会話文を完成させる問題で、語法的・社会言語学的・談話的知識を問うている。対話の内容が受験者にとって分かりやすいものになっていたと考える。Cは対話形式の文脈を与え、ふさわしい応答文を完成させる問題である。マークシート方式という制約の中で、スピーキングやライティングの技能につながる出題をすることが、高等学校でのコミュニケーション能力を育成する学習を促す上で重要と考える。高等学校教科担当教員（以下「高校教員」という。）側からも、Cについては「会話文の論理展開を読み取れば自然な英文を構成していくことができる問題」とのコメントを得た。

第3問 談話レベルにおける文章の理解力を測定する問題である。Aは平成26年度より出題の問題で、各パラグラフのまとまりを良くするために取り除いた方が良い一文を選ばせる問題である。文法能力に加えて談話能力の育成が重要であることを踏まえると、英語の授業に対して一定の示唆を与える問題であると考え。内容も高校生にとって興味深いものになるよう留意した。Bは「慈善活動の企画」について7名の大学生によるやりとりを読み、情報を整理しながら概要や要点を把握し、発言者の意図を正しく理解しているかを測定する問題である。高校教員側からは、「直前のある一人の発言内容をまとめるだけでなく、複数の学生の意見を総合したり、次に続く展開を述べたりと、話し合いの流れを追いながら理解していく読み方」を問う問題であると高く評価された。全体に識別力も比較的高く、バランスの取れた問題であったと思われる。

第4問 多様な見方や考え方が可能な幅広い話題・問題に関する英文や図表などを読みながら、必要な情報を読み取り、英文を理解する力を測定する問題である。Aは「ボール投げの練習の仕方と結果の関係」に関する説明文を図に示された情報と合わせて読むことにより、必要な情報を正確に読み取る力を測定する問題である。昨年度までは英文中に図やグラフが含まれていたが、今年度は設問中に図が提示されていた。実験自体が受験者にはなじみの薄いものであり、読解の負担はやや高かったかもしれない。Bはスキミングの方法を用いて、「フリーマーケットの出店申請に関する案内」から必要な情報を探し出し、情報処理の一環として英語を理解する能力を測定する問題である。従来の注意深い読み方と的確な判断力を求める出題意図は変わっていない。高校教員側からは「題材も身近で比較的取り組みやすい出題」とのコメントがあった。A、Bともに識別力が高い問題であった。

第5問 出来事の展開を叙述する文章の理解力を測定する問題である。ある視点から語られたストーリーを題材に、その状況、展開、概要、要点などを理解する力を測定する。本年度の試験では、「山ではくれた愛犬との不思議な再会」について一人称で書かれた標準的な物語文が出題された。高校教員側からは、「ファンタジーの要素を含んでいるが、平易な英文で描写されているため場面の把握は容易であった」とのコメントを得ている。こうした物語文の出題は豊かな心を育むことにもつながるため、継続して出題することを期待されている。総じて識別力の高い妥当な問題であったと思われる。

第6問 まとまりのある説明的な文章の理解力を測る問題で、比較的長い説明文を論点や論の構造に注目して読み、筆者が読者に伝えようとしているメッセージや行間の意味を理解し、概要や各パラグラフの要点を的確に把握することができるかを測るのが目的である。Aでは個別のパラグラフの内容に関する設問を五つ設定し、Bではパラグラフごとの要点と相互間の関係、

全体の構成を意識した設問になっている。

本年度は「自動販売機の発達」に関する論説文を題材とした。おおまかな形式、設問数、配点のいずれも昨年度と同様である。総じて識別力の高い問題であった。「英語の正確な知識に基づいて細部の情報を読み取りながら、同時に文章全体を俯瞰して読む力が問われる良問であった」との評価を高校教員から得ている。

3 出題に対する反響・意見についての見解

各方面からのコメントはおおむね肯定的なものであった。特に高校教員からは、「高等学校での学習内容の定着度を測る適切な問題であった」、「内容やテーマが受験者に身近なものであり取り組みやすく、特定の受験者に有利になると思われるものや分野の偏りもなかった」、「コミュニケーション能力を重視した学習の成果を問う問題として妥当であった」と評価されている。また、特に第3問A、B、第5問に関し、「文脈の理解や行間を読むことが求められ、思考力を測るものとして適切であった」と評価が高かった。問題作成部会においても、英語でのコミュニケーション能力の習得を目標とした指導要領の趣旨に沿い、かつ、新教育課程にも対応した問題を作ることができたと認識している。問題作成の方針にあるように、「読むこと」の能力を測定する問題にしても、概要や要点を把握して思考・判断をさせる問題になるよう工夫したこと、高校生が興味を持てる内容にしたことが評価されたと考えている。また、「読むこと」だけでなく、「話すこと」、「書くこと」の能力として問われる「適切な表現を用いて論理的・批判的に」表現する力をも測定できる問題を含めることができたと考える。昨年度の出題と比較すると平均点はやや下がったが、全体としてはほぼ理想的な結果になったと判断している。

4 ま と め

センター試験の全科目の中で、「英語」は最も多くの受験者が受験する科目であり、各方面からの関心度が高い。あくまでも日本の高等学校段階における英語学習の達成度を判定することを狙いとしていることからすれば、海外留学（TOEFL、IELTS）あるいは国際ビジネス（TOEIC）を念頭に置いた国際標準の試験とは目的が異なる。また、センター試験問題が試験日の翌日に新聞等で全て公開され、教育関係者のみならず一般国民の目に広く触れることも特徴的である。したがって、本試験は競争的試験として他に類を見ない特殊性・公開性の下に行われているものと言えよう。

本試験の以上のような特性から、試験の内容・形式に関しては、教育の現場に及ぼす影響を十分に考慮し慎重な配慮が必要である。英語の問題作成に関しては、指導要領に沿ったコミュニケーション能力の育成を目指し、これまで徐々に部分的に変更してきた。ただ今年度はセンター試験として最後の出題になったこともあり、受験者への配慮からも大きな内容・形式の変更することはしていない。また、リーディング能力の測定のみに偏らないように、多様な言語技能や思考力を測ることを意識的に考慮した。さらに、受験者に応用することを期待したい様々な方略を示唆する問題が含まれている。内容面でも、出題に偏りがなく、また特定の団体やジェンダーに関する差別的内容が含まれないよう、更に高校生にとって興味を持てるものになるように配慮した。これまでの問題作成の中で培われたセンター試験の良質な特徴が、引き続き大学入学共通テストでも生かされることを期待する。